

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン

令和7(2025)年8月5日

日高山脈襟裳十勝国立公園協議会

目次

1.はじめに.....	2
(1)ビジョン策定の目的.....	2
(2)対象区域	2
(3)日高山脈襟裳十勝国立公園の概要.....	4
2.価値・魅力	5
3.現状と課題.....	7
(1)保護に関する事項	7
(2)利用に関する事項.....	11
(3)管理運営体制に関する事項.....	14
4.基本理念	16
(1)自然環境の厳正な保護	16
(2)適正な利用の推進	16
(3)連携・協働の推進	16
5.国立公園としてのビジョン(るべき姿、目指すべき将来像)	17
(1)原生的な自然とその恵みを、後世まで守り伝えていく国立公園	17
(2)利用者のレベルに応じた楽しみ方があり、自然体験の質が確保されている国立公園	17
(3)みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園	17
参考資料	18
(1)参照文献.....	18
(2)日高山脈襟裳十勝国立公園協議会規約・名簿	21
(3)日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョンの作成経緯	26

1. はじめに

(1) ビジョン策定の目的

日高山脈襟裳十勝国立公園は、2024(令和6)年6月25日に日高山脈襟裳国定公園とその周辺地域を含めて新たな国立公園として指定されました。本公園の誕生は、長年にわたり日高山脈を核とした自然環境等を保全し、適正に利用するとともに、文化を育んできた地域の関係者及び関係機関の取組が評価され結実したものです。

本公園を未来に引き継ぎより良い姿にしていくためには、本公園が目指す将来像を明確にし、その実現に向けて関係者が連携して取組を進めていく必要があります。

このため、関係者が連携する場として「日高山脈襟裳十勝国立公園協議会」を設置し、同協議会において本公園が目指すべきビジョンを策定しました。

今後、本ビジョンの実現に向けて本公園と繋がるすべての関係者ができることを持ち寄り、連携して取組を推進することにより、世界水準の国立公園を目指します。

(2) 対象区域

日高山脈襟裳十勝国立公園全域を対象とします。



図1:日高山脈襟裳十勝国立公園 公園区域図

(3)日高山脈襟裳十勝国立公園の概要

本公園は、南北およそ140kmに及ぶ日高山脈を中心とした陸域面積が日本最大の国立公園です。

本公園は、地殻変動を受けて形成された非火山性連峰を基盤に、山地を核として育まれた深く原生的な自然環境が広がる風景を有するものとして、国立公園に指定されています。地殻変動を受けて形成された山脈が内陸部から海まで延々と連なる雄大さと、国内最大の原生流域が存在していることが大きな特徴です。

2. 価値・魅力

日高山脈襟裳十勝国立公園の核心部となる日高山脈は「北海道の背骨」と呼ばれ、鋭い稜線から急峻な山腹を経て広大な山麓へと続き、そこに日本最大の原生流域が広がっています。その成り立ちは、北海道付近において2つのプレートの衝突が進行し、東側のプレートの地殻がめくれ上がるよう突き上げられたことに由来し、本来は地下深くにある地質の断面が連続的に地表に現れています。つまり、山脈を西から東へ横断すると、プレートの地殻最下部から地殻上部までの岩石を現在の地表で連続的に観察できる世界的に見ても珍しい場所です。また、ユネスコ世界ジオパークにも認定されているアポイ岳(標高810m)周辺には、地球深部(マントル)の様子を知ることができる新鮮なかんらん岩が見られます。

本公園はその特異な成り立ちとともに、海岸から高山帯までの大きな標高差と南北方向に長い特徴から、多様な環境を有し、生物多様性に富んでいます。広大な山域には、国指定天然記念物「沙流川^{さるがわ} 源流原始林」をはじめとした自然林(天然林)が広がり、我が国最大規模のまとまりをもつ原生流域として特筆されます。

日高山脈北部では、最高峰である幌尻岳(標高 2,052m)をはじめ、1,900m を超える山々が連なり、稜線(風衝地)からカール地形(雪崩地や雪田など)に至る環境変化に応じて多様なお花畠(高山植物群落)が広がっています。山脈の中央部から南部にかけては 1,800m 台から 1,500~1,300m 台へ標高が低くなりますが、山頂・山稜の風衝地と雪崩地に高山植物群落が成立しています。日高山脈の高山植物相は、固有種ヒダカキンバイソウや隔離分布種ヒダカゲンゲなど、山脈の成り立ちや特異な地形・地質と関係して他山系とは異なる特徴が認められます。森林も多様であり、亜高山帯に広くダケカンバ林が発達するほか、中腹(亜高山帯)の亜寒帯性常緑針葉樹林と山麓(山地帯)の針広混交林、アポイ岳を含む南端部の山麓では、北海道では珍しいミツデカラデやアカシデなどが混生する冷温帯性落葉広葉樹林や針広混交林、さらにはキタゴヨウとアカエゾマツが混生するかんらん岩地と結びついた針葉樹林が広がっています。

日高山脈で育まれた動植物は、生命を終えるとやがて分解されて河川に流れ込み、豊かな栄養分を海に運び、魚介類や海藻などを育んでいます。その海で栄養を蓄えたサケ、サクラマス、アメマスなどは産卵のために川を遡上し次世代に命をつないでいます。また、河川の魚類は大型猛禽類などの食料にもなっています。このように、日高山脈を源流とし太平洋に注ぐ河川は、山岳から海に至る生態系のつながりを育んでいます。

また、日高山脈を源流とする河川の流域には、アイヌのコタン(集落)が形成され、アイヌの人々は、狩り場とした後背地や対岸に広がる原生林までを含めた一定領域をイオル¹(伝統的生活空間)として、その内で動植物を活用して生業を営み、自然と共生して豊かな文化を育んできました。国指定名勝ピリカノカの構成資産「ポロシリ(幌尻岳 や 十勝幌尻岳)^{ぼろしりだけ}」や「オンネエンルム(襟裳岬^{えりきみさき})」をはじめ、祈りや崇拝の対象となってきた重要な場所も多くあります。また、アポイ岳やエンルム岬など、民話や伝説の題材になっている場所もあります。

¹ イオル:イウォロやイウォル、イオロなどとも呼ばれる、アイヌの伝統的生活空間。動物の捕獲や山菜採取など、自然と共生していたアイヌの人々の伝統的な生活の場。

動物相も多様で、ヒグマ、エゾシカなどの大型哺乳類が多数生息します。氷河期の遺存種といわれるエゾナキウサギも分布し、日高山脈の南部では、低標高(標高50m)にも生息が確認されています。襟裳岬付近の海岸には、豊かな海を象徴するように、ゼニガタアザラシなどの海生哺乳類が生息しています。また、本公園では、自然度の高い植生や河川に支えられ、生態系の上位種であるシマフクロウやクマタカなども生息しています。そのほか、国内ではアポイ岳にのみ生息するヒメチャマダラセセリ、陸産貝類の固有種アポイマイマイ、甲虫類の希少種チビゴミムシ類などが生息しています。

独特な自然景観にも魅力があります。日高山脈の稜線部には、寒冷期に氷河が作り上げたカール(けんこく)、ホルン(氷食尖峰)、アレーント(鋸歯状山稜)などの氷食地形が見られます。山麓部に形成された険しい峡谷や断崖も、新緑や紅葉シーズンを中心に美しい景観を見せてています。襟裳岬周辺では、海成段丘、海食崖、岩礁などの海岸地形が発達し、景勝地となっています。

さらに、本公園外の地域からも雄大な山々が連なる素晴らしい景観を見るることができます。

本公園の利用上の魅力として、日高山脈の山々は、沢登りや、やぶこぎをするコースも多く、ここでしか味わえない本格登山の魅力があります。ただし、日高山脈の登山には、十分な体力、知識や経験、適切な装備と登山計画が必要です。一方、低標高域にあるアポイ岳などの山には登山道が整備され、日帰りで行くことのできる人気のコースとなっており、高山植物や日高山脈らしい山岳景観を楽しむことができます。近年は山麓で雄大な山岳景観を眺望するだけではなく、サイクリングやラフティング、クルーズなどの新しい利用がされつつあります。

そのほかに利用だけではなく、登山道やトイレ利用の適正化、高山植物群落の再生事業など、国立公園の指定前から各地域では地元を中心としてさまざまな環境保全の取組が行われています。

3. 現状と課題

(1) 保護に関する事項

・高山生態系

山脈の成り立ちや特異な地形・地質と関係して、比較的狭い高山生態系には、日高山脈の生物多様性を特徴づける固有種や隔離分布種が多く生息・生育します。

高山生態系の多くは、山頂・山稜(風衝地)とカール地形(雪崩地と雪田)に発達しています。風衝地ではヒダカゲンゲ、ユキバヒゴタイなどの隔離分布種、雪崩地ではヒダカキンバイソウなどの固有種、雪田ではタカネクロスゲなどの隔離分布種が見られます。

特にアポイ岳は、ヒダカソウなどの固有種や希少な隔離分布種が集中し、国指定特別天然記念物に指定されているアポイ岳高山植物群落は、国内で唯一のヒメチャマダラセセリの生息地です。しかし、ヒダカソウなどの植物は度々盗掘の被害を受け、大きく個体数が減少しました。また、気候変動の影響と考えられる植生遷移の進行により、ハイマツ群落が増え、高山植物群落の衰退が進んでいます。ヒメチャマダラセセリもこの影響を受け、その個体数の減少が続いてきました。

日高山脈の高山帯全体においても、希少植物の盗掘被害のほか、エゾシカの増加や登山道逸脱による踏み付けなどによっても、貴重な高山生態系の基盤が脅かされています。

一方で、市民団体による高山植物の盗掘防止パトロールや登山者に対するマナーの啓発等が継続して行われているほか、地域ぐるみで高山植物群落の保全の取組もされています。



七つ沼カールと幌尻岳



カムイエクウチカウシ山のお花畠



ヒメチャマダラセセリ

・森林生態系

日高山脈は広大な森林生態系を擁しており、多様な群落タイプが認められます。急峻な山腹斜面に発達するダケカンバ林、沙流川源流原始林の亜高山帯(亜寒帯)常緑針葉樹林、アポイ岳周辺にあるかんらん岩地のキタゴヨウ・アカエゾマツ林は、それぞれ原生林として特記されます。さらに全域にわたり亜高山帯(亜寒帯)には常緑針葉樹林、山地帯(冷温帯)には針広混交林や落葉広葉樹林が植生自然度の高い状態で分布しています。広大な森林が広がる本公園は、ヒグマやエゾシカのほか、天然記念物のクマゲラ、希少猛禽類であるクマタカやシマフクロウなどの重要な生息地になっており、今後もクマゲラ、クマタカ、シマフクロウが生息するためには大径木を含む発達した森林が必要になります。また、氷河期の生き残りと言われるエゾナキウサギも生息しています。

本公園内の国有林野の大部分は、林野庁北海道森林管理局が設定した日高山脈森林生態系保護地域となっており、そこでは、モニタリング等を通じて、多様かつ原生的な天然林からなる森林生態系を保護・管理するための長期的な取組が行われています。



沙流川源流原始林



クマゲラ



エゾナキウサギ

・河川生態系

日高山脈に端を発する河川では、その水域や周辺環境の相互作用による河川生態系が見られます。河川に流れ込んだ落ち葉や水中の藻類などを水生昆虫やニホンザリガニが食べ、水生昆虫などをサケ科魚類である、サクラマス、アメマスのような降海魚、オショロコマのような陸封魚などが食べ、さらに魚類等を大型猛禽類などが食べるといった、食物連鎖(食う・食われるの関係)が形成されています。また、峡谷地形が隨所に発達し、岩場にはヤシャゼンマイ、エゾトウウチソウ、ソラチコザクラなどの特色ある植物が生育し、下流の氾濫原にはケショウヤナギの群生地が見られます。さらに、原生的な森林と河川を有する本公園は、国内希少野生動植物種に指定されているシマフクロウの重要な生息地になっています。

一方で、源流域に陸封されているオショロコマについては、生息域の分断、外来魚との競合、捕獲圧等により、生息域の縮小や生息数の減少が危惧されています。シマフクロウが生息するためには、餌となる魚類が豊富に生息する河川と、営巣木となる大径木を含む河畔林が必要になります。また、巣立ったシマフクロウが新たに営巣することができるよう、好適な河川環境が連続的に分布する環境を整えていく必要があります。ケショウヤナギのように、洪水攪乱に依存する野生生物の存続に配慮していくことも、地域の生物多様性を保全するために必要であり、生物の生息・生育・繁殖の場を保全・再生・創出するなど長期的な取組が必要です。



沙流川渓谷



砂礫地の多い歴舟川



ソラチコザクラ



シマフクロウ

・海浜や海洋の生態系

本公園南部の襟裳岬周辺には海岸断崖がところどころ発達し、ヒダカミセバヤをはじめ、北方系のコハマギクやチシマキンバイと温帯系のキキヨウなどの希少な植物が混じって生育するほか、希少猛禽類のハヤブサが営巣しています。

また、襟裳岬付近の海岸には、豊かな海を象徴するゼニガタアザラシなどの海生哺乳類が生息しています。ゼニガタアザラシについては、特定希少鳥獣管理計画に基づきその個体群と沿岸漁業を含めた地域社会との将来にわたる共存を図る取組が進められています。

海洋の生態系は、河川を通して陸域の森林ともつながっており、その恵みが魚介類や海藻類を育んでいます。沿岸の岩礁帯には日高地方特産のミツイシコンブ(日高昆布)が豊富に生育することからコンブ漁やウニ漁が盛んで、その漁労風景は夏の風物詩にもなっています。

一方で、海水温の上昇など、海洋環境の変化に伴い漁獲される水産物に変化が見られています。また、海岸断崖の消失や改変も進んでおり、残された自然海岸を保持し、希少な動植物を保全することが必要です。



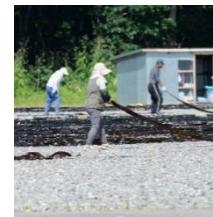
襟裳岬



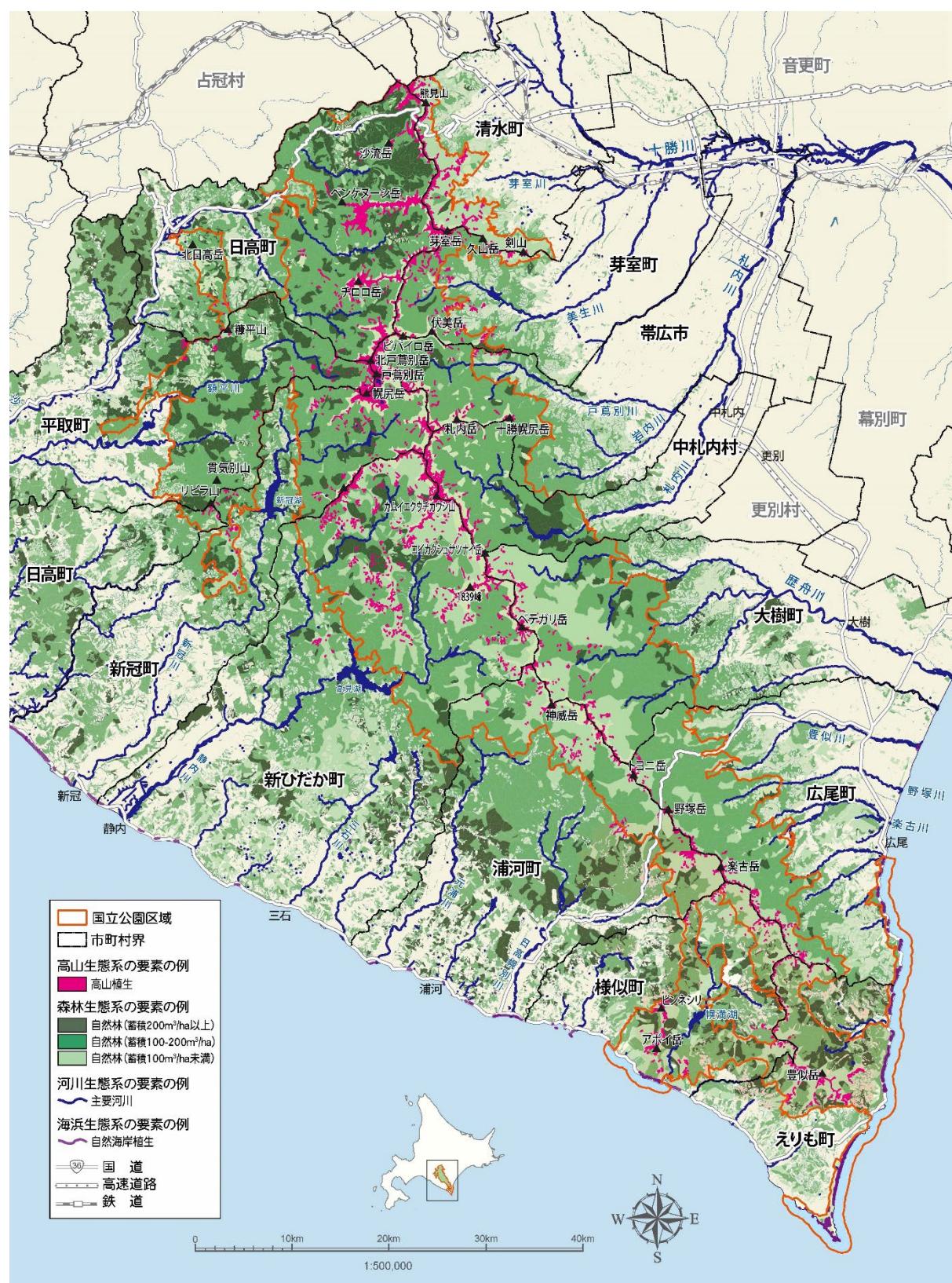
ヒダカミセバヤ



ゼニガタアザラシ



コンブ干し



(2)利用に関する事項

・登山利用等

日高山脈の山々には、原生的な自然や独特な山岳美に加え、沢登りや、やぶこぎなどを伴うここでしか味わえない本格登山を楽しめる魅力があります。一方で、登山口までのアクセスが容易ではない場所が多いこと、山中の避難小屋は限られていること、尾根に上がるために沢沿いの渡渉を伴うことなどの特徴もあります。怪我や遭難、ヒグマなどの野生動物との遭遇など様々な危険が伴うため、十分な体力、知識や経験、適切な装備と登山計画が必要です。また、植生の回復が難しい稜線部やカールでの高山植物の踏み付け、野営による裸地化や、焚火の跡、ゴミの投棄、トイレ跡などが確認されているため、地域ルールの設定や一層のマナー等の周知の取組とともに、登山者のルール・マナー遵守が求められます。

一方、低標高域にあるアポイ岳などの山には登山道が整備され、比較的容易に高山植物や山岳景観を楽しむことができ、人気のルートとなっています。ただし、アクセスのしやすい場所では、観光客の集中による自然環境への負荷も懸念されており、オーバーツーリズムの未然防止・抑制が必要と考えられています。



沢登りを伴う幌尻岳登山



アポイ岳登山



剣山登山

・眺望を生かした観光等

日高山脈の独特的な眺望にも魅力があります。山麓部の険しい峡谷や断崖もその一つで、札内川のピヨウタンの滝や幌溝峠^{ほろまんきょう}などの景勝地だけでなく、日高山脈を横断する国道274号や236号沿いなどでも、新緑や紅葉シーズンを中心に美しい風景を見ることができます。また、襟裳岬周辺では、海食崖、岩礁、砂浜などの海岸地形が発達し、日高耶馬溪や百人浜、フンベの滝などの景勝地があります。さらに、十勝平野や日高沿岸をはじめ本公園外の地域からも、国立公園の核心部である雄大な山岳景観が一望できます。

ただし、利用面で拠点になるエリアが限られていることから、一部の景勝地に観光客が集中し、オーバーユースとなる懸念があります。既存の利用拠点の魅力向上、拠点エリア間(例えば、複数のビジターセンター間)の連携に取り組むほか、山麓部における豊かな自然を活かした自然に対する学びや体験の場の提供、情報発信の充実等により、滞在型の周遊観光につながる広域連携や利用の分散を図ることが求められます。



秋の豊似湖



日勝峠



日高国際スキー場



十勝平野から日高山脈



図3:日高山脈襟裳十勝国立公園 主要な路線・施設の分布図

(3)管理運営体制に関する事項

・関係機関・関係団体・関係者等(以下「関係者」という。)との連携

本公園には、ここでしか触れることができない多くの魅力や価値があると同時に、多くの課題があります。様々な課題に対応し、本公園をより良い姿にしていくためには、まずは関係者がそれぞれ理念を共有し、広域的に連携・団結して取り組んでいくことが欠かせません。国立公園の指定前から各地で問題意識を持って環境保全や自然体験活動等の取組が行われており、それぞれの地域で成果が蓄積されています。関係する行政機関や団体が多いことも本公園の特色の一つであり、お互いにできることを持ち寄り、連携することで課題解決に向けた大きな力になることが期待できます。さらに、少子高齢化が進行する社会において担い手の減少が課題となる中で、関係者に限らず、より多くの方々の力を集約する仕組み等を考えていく必要があります。

・利用施設・拠点・体験プログラムの充実

本公園は、多様な自然・文化的要素からなり、一箇所を訪れただけではその魅力を十分に理解することは難しく、本公園全体の魅力を紹介する情報発信機能も充実してはいません。また、観光コンテンツ²等の対価の一部を保護に再投資される仕組みづくりも始まったばかりです。

本公園の魅力である多様な自然景観と、生活・文化・歴史が凝縮された物語を知ることで、忘れられない唯一無二の感動や体験ができるような、博物展示施設や体験プログラム等を提供することは大切です。また、ツアーコースや自然体験プログラムの造成にあたっては、自然環境への負荷や文化的要素に配慮するとともに、自然環境モニタリング等により負荷の度合いを把握し、必要に応じて改善する仕組みを取り入れたり、利用者負担等により得られた対価の一部を保護の取組に活用(再投資)したりするなど、保護と利用の好循環を目指すことは、持続的な地域づくりにつながります。各拠点の観光コンテンツも相互に紹介できるような情報共有体制づくりも、本公園全体の魅力発信・広域周遊につながります。

それらをサポートする自然ガイドや登山ガイド、歴史・文化を継承する担い手の育成も求められています。拠点施設のユニバーサルデザイン³化等の施設整備も課題になっています。



² 観光コンテンツ:地域資源を活用して旅行者に提供する滞在・体験のプログラムやツアーのことを主に指す(「サステナブルな観光コンテンツの実践に向けた事例集(観光庁作成)」より引用)

³ ユニバーサルデザイン:あらかじめ、障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方(障害者基本計画(平成14年12月閣議決定))

・自然・歴史・文化の学習のための人材・ソフトの充実

本公園には、自然や歴史・文化など、多くの魅力や価値があるものの、まだそれらに対する地域住民の理解・関心は十分ではないと思われます。国立公園をより良い姿にしていくためには、地域住民を含めた関係者一同が本公園の価値・魅力の共通認識を保つことが重要です。これまで関係する各市町村の博物展示施設などが中心となって、地域の自然や歴史・文化など普及啓発の取組が行われてきており、こうした取組を継続・補強・発展していくことが必要です。



アポイ岳ジオパークビジターセンターの展示

4. 基本理念

海から山脈の最深部まで連続する日高山脈襟裳十勝国立公園は、原生的で雄大な山岳景観を体感できる貴重な場であり、多くの人々を魅了し続けています。また、その優れた自然環境は、地域の人々の生活・産業の源泉として重要な機能を果たすとともに、特有の風土や豊かな文化を育み発展させてきました。

この貴重な自然環境を将来世代に継承し、後世までその恩恵を享受できるよう、以下の事項を基本として関係者が連携して厳正な保護と適正な利用を推進することにより、世界水準の国立公園を目指します。

(1)自然環境の厳正な保護

本公園の最大の特徴である原生的な自然を重視するとともに、その自然が生活の源泉であり、地域の風土や文化を育んでいることを踏まえ、後世までこれらの恩恵を享受し続けられるよう、関係法令に準拠しながら厳正に保護する。

(2)適正な利用の推進

本公園が持つ自然環境や文化景観としての価値を損なうことのないよう、誰もが本公園の価値とその保全の重要性を認識した上で、山、森、川、海への畏敬の念をもって行動し、適正な利用を推進する。また、想定する自然体験の質に応じた利用環境の整備及び管理を推進し、原生的な自然という特性を活かした質の高い体験を提供する。

(3)連携・協働の推進

関係するそれぞれの地域、そこで活動する様々な関係者、これらの関係者が実施している様々な取組について、連携・協働を推進することにより、効率的で効果的な公園管理に繋がることから、本公園の魅力向上を図るため各地域間、各関係者間、各取組の連携を推進する。

また、本公園内には一般利用者が車両等で気軽に来訪できる場所が限定されていることから、公園外の施設の活用などについて関係者との広域連携の取組を推進し、その価値や魅力の理解促進に努める。

さらに、利用ルールの設定、限定体験の提供、利用者負担などに取り組み、適正な利用とその対価が保護に再投資される仕組みをつくるとともに、脱炭素化や地産地消などに取り組み、自然環境の保護と利用が持続可能な地域づくりにつながるようにする。

5. 国立公園としてのビジョン(あるべき姿、目指すべき将来像)

基本理念に基づき、国立公園の厳正な保護及び適正な利用の推進を図るため、次のような国立公園を目指して日高山脈襟裳十勝国立公園の協働型管理運営を進めていきます。

(1)原生的な自然とその恵みを、後世まで守り伝えていく国立公園

- 本公園の根幹である原生的な自然や豊かな生物多様性が、その機能とともに良好な状態で厳正に保持されている
- 山から海までつながる独自の生態系や景観の連続性が良好な状態で維持され、自然の恵みを提供している
- アイヌの世界観をはじめとした自然環境と結びついた文化景観としての価値が維持されている

(2)利用者のレベルに応じた楽しみ方があり、自然体験の質が確保されている国立公園

- 核心部の上級者向け登山から山麓部での広域周遊まで、利用者の特性(目的・趣向)やレベル(技術・情報)に応じた幅広い楽しみ方があり、何度も訪れたくなる
- 環境に回復困難な負荷をかけないように、適正なゾーニングや利用上のルール・マナーが示され、利用者や事業者にその情報が行き届き守られている
- 利用者は、唯一無二の感動・体験をすることができ、その感動・体験を通じて、本公園を含む地域の自然、生き物、文化、暮らし等を学ぶことができる

(3)みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園

- 多様な立場の関係する行政機関や団体が参画する協働型の管理運営体制等を活用しつつ、それぞれが役割を認識して主体的に取り組み、様々なアイデアを取り入れながら、相互に連携・協働した取組を推進している
- 原生的な自然や生物多様性を損なうことがないよう厳正に保護しながら、地域活性化が持続的に実現できるよう、保護と利用の好循環の仕組みや連携・協働した体制が構築されている
- 国立公園外を含む本公園に関係するあらゆる人々が、本公園の価値・魅力を共有して、知恵を出し合って連携して取り組んでいる

参考資料

(1)参考とした文献

○公園の指定書

- 環境省(2024)日高山脈襟裳十勝国立公園指定書[新規指定].環境省

○公園の策定にかかる報告書類

- 財団法人国立公園協会(2007)平成19年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 財団法人国立公園協会(2008)平成20年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 財団法人国立公園協会(2009)平成21年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 株式会社建設技術研究所北海道支社・環境省北海道地方環境事務所(2013)平成24年度富良野芦別・日高山脈襟裳基礎資料収集分析業務報告書.
- パシフィックコンサルタント株式会社・環境省北海道地方環境事務所(2017)平成28年度日高山脈襟裳国定公園及び周辺地域調査業務報告書.
- 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2018)平成29年度日高山脈襟裳国定公園及び周辺地域調査業務報告書.
- 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2019)平成30年度日高山脈襟裳国定公園及び周辺地域調査業務報告書.
- 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2020)令和元年度日高山脈襟裳地域に関する公園計画策定検討業務報告書.

○日高山脈地域における調査報告書類

- 北海道(1978)日高山系自然生態系総合調査報告書(動物編).
- 北海道(1979)日高山系自然生態系総合調査報告書(総説・植物篇).
- 株式会社さっぽろ自然調査館(2008)平成20年度大雪・日高緑の回廊及び周辺に存する天然林等の森林環境等基礎調査委託事業報告書.北海道森林管理局
- 株式会社さっぽろ自然調査館(2008)平成20年度大雪日高地域の森林生態系保護地域等の設定等のための調査.北海道森林管理局
- 株式会社さっぽろ自然調査館(2011)日高山脈森林生態系保護地域設定報告書、大雪・日高緑の回廊設定報告書.北海道森林管理局
- 様似町(2021)特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業令和2年度実施報告書.様似町
- 様似町(2022)アポイ岳自然環境保全再生基本計画.様似町
- 渡辺 修・渡辺展之(2022)保護区域を効果的に拡大するには.自然保護589

○植物に関する総合的な文献

- 伊藤浩司(編著)(1987)北海道の植生.北海道大学図書刊行会
- 林田光祐(1989)北海道アポイ岳におけるキタゴヨウの種子散布と更新様.北海道大學農學部演習林研究報告,4 6(1),177-190
- 高橋 誠(1990)日高山脈幌尻岳の高山植物.平取町商工観光課
- 西川洋子・宮木雅美・掘 繁久(1993)アポイ岳におけるお花畠の縮小とそれにともなう高山植物相の変化.北海道環境科学研究センター所報 20: 89-96
- 新版「えりもの植物」出版実行委員会(1999)新版えりもの植物.えりも町教育委員会
- 高橋 誠・田中正人(2003)アポイ岳の高山植物と山草.アポイ岳ファンクラブ
- 増沢武弘ほか(2005)特集Ⅰ:アポイ岳の植物群落-アポイ岳の高山植物群落の現状と将来について.日本生態学会誌(55)
- 佐藤 謙(2007)北海道高山植物誌.北海道大学図書刊行会

- 永光輝義(2008)雑種に起源する固有種—アポイカンバと北海道アポイ岳の高山植生の衰退(特集希少樹種の現状と保全). 生物科学 59(3), 143-148
- 西川洋子・住田真樹子・棘 庄輔(2009)温暖化にともなうアポイ岳ヒダカソウの開花時期の変化. 保全生態学研究 14(2), 211-222
- 佐藤 謙(2024)特集:日高山脈の魅力 日高山脈の植物概説. 北海道の自然 No.62, 14-19

○動物に関する総合的な文献

- 北海道環境科学センター(1996)ヒグマ・エゾシカ生息実態調査報告書Ⅱ野生動物分布等実態調査(ヒグマ: 1991~1995年度). 北海道環境科学センター
- 柳川 久・山田知江美・植田幹夫・市川利美(2004)北海道十勝・日高地方の翼手類相(3)えりも町猿留川上流部における捕獲記録. 森林野生動物研究会誌 30, 21-27
- 宮腰靖之(2007)サケ・マス類の生息環境と資源増殖に向けた取り組み. 第4回河川環境と魚類に関するセミナー
- 川辺百樹(2008)北海道におけるエゾナキウサギの分布. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告30号
- Tomoki Sakiyama, Junko Morimoto, Osamu Watanabe, Nobuyuki Watanabe, Futoshi Nakamura (2021) Occurrence of favorable local habitat conditions in an atypical landscape: Evidence of Japanese pika microrefugia. Global Ecology and Conservation 27

○地質に関する総合的な文献

- 高橋功二・鈴木 守(1986)5万分の1地質図幅「日高」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 44p
- 蟹江康光・酒井 彰(2002)5万分の1地質図幅「浦河」および同説明書. 地質調査所
- 松下勝秀・鈴木 守(1962)5万分の1地質図幅「農屋」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 31p
- 北海道立地下資源調査所(1978)5万分の1地質図幅「岩知志(札幌-45)」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 46p
- 和田信彦・高橋功二・渡辺順・蟹江康光(1992)5万分の1地質図幅説明書『三石』および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 73p
- 吉田 尚・松野久也・佐藤博之・山口昇一(1959)5万分の1地質図幅「比宇(札幌-56)」および同説明書. 北海道開発庁, 54p
- 橋本誠二・鈴木 守・小山内熙(1961)5万分の1地質図幅「幌尻岳(釧路-50)」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 46p
- 産業技術総合研究所地質調査総合センター(2002)地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)「浦河地域の地質(釧路-69)」. 北海道立地下資源調査所, 43p
- 松野久也・山口昇一(1958)5万分の1地質図幅および同説明書『静内』. 北海道開発庁, 36p
- 酒井 彰・蟹江康光(1986)地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)「西舎地域の地質」. 地質調査所
- 石城謙吉・福田正己編(1994)北海道・自然のなりたち. 北海道大学図書刊行会, 228p
- 伊藤谷生・在田一則・井川崇(1998)日高山脈に島弧の衝突をみる 反射法地震探査で島弧深部構造に挑む. 科学 vol.68, 72-78. 岩波書店
- Kazunori Arita, Jinichiro Maeda and Kyoaki Niida(2003)Deep-Seated Plutonic and Metamorphic Rocks of the Hidaka Mountains, Hokkaido. IUGG 2003 Field Trip Guidebook. The Volcanological Society of Japan, 265-308
- 在田一則(2006)日高山脈と夕張-芦別山地の生い立ち. 北海道の自然第 44 号, 36-45. (社)北海道自然保護協会
- 小山内康人・大和田正明・島 剛志(2007)日高衝突帯下部地殻の岩石構成と変形運動. 地質学雑誌 113 卷補遺, 29-50.
- 在田一則(2009)沙流川流域周辺はなぜ土砂流出が多いか?—地質学的検討. 北海道の自然第 47 号. (社)北海道自然保護協会

- 在田一則(2010)日高山脈の生い立ち-異常な土砂流出に関して.労働文化,11-17
 - 在田一則(2024)日高山脈の生い立ちと地形の特徴.北海道の自然No.62,7-13
- 利用に関する総合的な文献
- 宮坂省吾・田中実・田近淳・中川光弘・岡 孝雄(2011)札幌の自然を歩く[第3版]-道央地域の地質あんない.北海道大学出版会
 - 駒井千恵子・三浦忠雄(1998)フィールドガイド日高路.北海道新聞社
 - 様似町(2010)アポイ岳ジオパークガイドブック.様似町
 - 梅沢 俊(2012)北の花名山ガイド.北海道新聞社
 - 梅沢 俊・菅原靖彦・長谷川哲(2020)最新第3版北海道夏山ガイド4日高山脈の山々.北海道新聞社
- 保全に関する総合的な文献
- 佐藤 謙(1993)生物の多様性の保護を熟考した緑化を!百人浜緑化問題.北方林業45(8):13-16
 - 高橋 健(2001)日高山脈の魅力とファンクラブの活動.北海道の自然39,18-22 (社)北海道自然保護協会
 - 北海道自然保護協会(2006)日高山脈と夕張山地を国立公園とする要望書.北海道の自然44,46 (社)北海道自然保護協会

(2)日高山脈襟裳十勝国立公園協議会規約・名簿

日高山脈襟裳十勝国立公園協議会規約

(名称)

第1条 本会は、日高山脈襟裳十勝国立公園協議会と称する。

(目的)

第2条 本会は、日高山脈襟裳十勝国立公園の保全と利用の目標を示した国立公園ビジョンを策定するとともに、その実現を目指して、構成員が連携した取組を推進することにより、本公園の優れた自然環境の保全と適正な利用を推進することを目的として設置する。

(協議事項)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事項を協議する

- (1) 日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョンに関する事項
- (2) 日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョンの実現に向けた管理運営方針及び行動計画に関する事項
- (3) 前号の行動計画に基づく取組の実施に関する事項
- (4) その他、前条の目的の達成のために必要な事項

(構成)

第4条 本会は、別添1に掲げる機関、団体等により構成する。

(会長)

第5条 会長は、北海道地方環境事務所長が務める。

(総会)

第6条 総会は、年1回開催するほか、会長の招集により必要に応じて開催する。

- 2 総会の議長は、会長が務める。
- 3 総会は、第3条の事項について協議する。

(幹事会)

第7条 本会に、幹事会を設置する。

- 2 幹事会は、必要に応じて事務局が招集する。
- 3 幹事会の構成員は、別添2による。
- 4 幹事会は、総会の議事に関する予備的協議、その他連絡調整を行う。
- 5 幹事会は、必要に応じ別添3のアドバイザーを招聘し意見を聴くことができる。

(部会)

第8条 本会に、部会を設けることができる。

- 2 部会の設置及び運営に必要な事項は、総会において決定する。
- 3 部会は、必要に応じ別添3のアドバイザーを招聘し意見を聴くことができる。

(事務局)

第9条 本会の事務局を、北海道地方環境事務所国立公園課に置く。

- 2 事務局は、会の庶務を行う。

附則 この規約は、令和6年8月27日から施行する。

別添 1

機関・団体等	構成員
学識経験者	中村 太士（北海道大学名誉教授）
	愛甲 哲也（北海道大学教授）
国	日高北部森林管理署長
	日高南部森林管理署長
	十勝西部森林管理署長
	北海道開発局開発監理部開発連携推進課長
	北海道運輸局観光部長
	北海道地方環境事務所長
北海道	環境生活部長
	日高振興局長
	十勝総合振興局長
市町村	帯広市長
	日高町長
	平取町長
	新冠町長
	浦河町長
	様似町長
	えりも町長
	新ひだか町長
	清水町長
	芽室町長
	中札内村長
	大樹町長
	広尾町長
登山関係団体	十勝山岳連盟会長
	日高山岳連盟会長
自然保護団体	アポイ岳ファンクラブ会長
	十勝自然保護協会 共同代表
観光関係団体	十勝観光連盟会長
	日高管内観光連盟会長

別添2

機関・団体等	幹事会構成員
有識者	中村 太士（北海道大学名誉教授）
	愛甲 哲也（北海道大学教授）
国	日高北部森林管理署長
	日高南部森林管理署総括事務管理官
	十勝西部森林管理署総括事務管理官
	北海道開発局開発監理部開発連携推進課開発企画官
	帯広運輸支局 首席運輸企画専門官(企画輸送・監査担当)
	室蘭運輸支局 首席運輸企画専門官（総務企画担当）
北海道	北海道地方環境事務所国立公園課長
	環境生活部自然環境局自然環境課自然公園担当課長
	日高振興局環境生活課長
市町村	十勝総合振興局環境生活課長
	帯広市都市環境部環境室環境課長
	日高町日高総合支所地域経済課長
	平取町觀光商工課長
	新冠町企画課長
	浦河町商工觀光課長
	様似町商工觀光課長
	えりも町産業振興課長
	新ひだか町総務部まちづくり推進課長
	清水町農林課長
	芽室町環境土木課長
	中札内村産業課長
登山関係団体	大樹町住民課長
	広尾町水産商工觀光課長
自然保護団体	十勝山岳連盟会長
	日高山岳連盟会長
観光関係団体	アポイ岳ファンクラブ会長
	十勝自然保護協会事務局長
観光関係団体	十勝観光連盟事務局長
	日高管内観光連盟事務局長

(アドバイザー)

学識経験者
アイヌ文化関係団体
登山関係団体又は山岳ガイド事業者
遭難対策関係団体
自然保護関係団体
観光関係団体又は観光事業者
交通事業者
経済関係団体
金融関係団体
その他、協議会が認める者

(3)日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョンの作成経緯

日時	会議名	概要
令和3年2月17日	日高山脈襟裳地域の国立公園指定に関する関係自治体連絡会(第1回)	国立公園ビジョンの検討開始
令和3年7月26日	日高山脈襟裳地域の国立公園指定に関する関係自治体連絡会(第2回)	国立公園ビジョン(骨子案)提示
令和4年2月4日	日高山脈襟裳地域の国立公園指定に関する関係自治体連絡会(第3回)	国立公園ビジョン(骨子案)にかかる意見交換
令和6年10月11日	令和6年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会第1回幹事会	国立公園ビジョン(骨子案)にかかる意見交換
令和6年12月20日	令和6年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会第2回幹事会	国立公園ビジョン(素案)にかかる意見交換
令和7年2月19日	令和6年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会第3回幹事会	国立公園ビジョン(素案修正版)にかかる意見交換
令和7年5月21日 ～6月15日	国立公園ビジョン(案)のパブリック・コメント(意見募集)	
令和7年6月23日	令和7年度日高山脈襟裳十勝国立公園協議会第1回幹事会	国立公園ビジョン(修正案)にかかる意見交換
令和7年8月5日	令和7年度第2回日高山脈襟裳十勝国立公園協議会総会	国立公園ビジョン策定(予定)